

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：34402

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02590

研究課題名（和文）教員養成のための日本および諸民族の音楽史教育方法論の構築

研究課題名（英文）Study of a Methodology for Teaching Music History of Japan and World Music for Teacher Training

研究代表者

井口 淳子（IGUCHI, JUNKO）

大阪音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：50298783

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は大学の音楽史教育のために制作された映像教材である。最終的に18本の映像教材（作品）を制作した（2024年6月現在でYouTubeに次のURLで公開中、URL：<https://www.youtube.com/channel/UCdNMYFCaaiEF3V2sIUqeaEA>）。内容は1.日本の伝統芸能、2.民族音楽（体験型ワークショップほか）、3.古楽・リコーダー、4.初期バロックのチャッコーナ、5.ルネサンスのポリフォニー合唱、6.バロックのチェンバロ音楽、7.ロマン派のピアノ音楽、8.バロックダンスである。鑑賞のみならず体験型、ワークショップ型授業に用いることが可能である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は音楽史の映像教材制作とその完成、公開である。現在すでに18本の映像教材をYouTube上に公開している。一本が30分程度にコンパクトにまとめられた映像は、大学の音楽史教育にそのまま使用できることから今後、広く音楽史教育で活用されることが期待される。また、大学のみならず、小中高の音楽科の授業においても鑑賞教材として、また、ワークショップ型授業の方法提示の映像として参照されることが十分期待できる。映像をもとに学生、生徒が自ら演奏する、踊るなどの体験をし、音楽の本質的理解に到達するというアプローチは、大学の音楽史教育と学校の音楽科教育に新たな体験型授業の可能性を開いたと言える。

研究成果の概要（英文）：The result of this research is video materials produced for music history education in colleges and universities. Ultimately, 18 video materials (works) were produced (available on YouTube as of June 2024 at the following URL: <https://www.youtube.com/channel/UCdNMYFCaaiEF3V2sIUqeaEA>). The contents are: 1. traditional Japanese performing arts, 2. folk music, 3. Baroque music and recorder, 4. early Baroque Ciaccona, 5. Renaissance polyphony chorus, 6. Baroque harpsichord music, 7. Romantic piano music, 8. Baroque dance. It can be used not only for appreciation but also for workshop-type teaching.

研究分野：音楽学

キーワード：音楽史 映像教材 音楽学 民族音楽学 西洋音楽史 古楽 ワークショップ 日本伝統芸能

1. 研究開始当初の背景

音楽史教育の現状として、非西洋音楽を教授する場合、対象音楽の映像、音響資料を鑑賞し、概説的知識を得ることを目的とすることが多い。例えば、世界各地の代表的とされる音楽ジャンルを音楽様式、楽器名称、楽器の特徴、奏法(歌唱法)の特徴というように言語知識として理解することで終始している。このように概説的知識を得る方法では対象音楽の種類と知識をどれだけ増やしたとしても、その音楽がどのような原理のもとに生み出されるのか、生成原理を理解することにはつながらない。現状のままでは学生が卒業後、音楽科教員として指導を行う場合、その指導が概説的知識の伝授に終始することは想像に難くない。そのことはひいては教育現場で生徒たちに「諸民族の音楽や我が国の伝統音楽とはとらえどころがない理解不能な音楽である」との誤解を与えてしまうことにつながりかねない。このような音楽史教育の現状を変えることができないかと考えた。

2. 研究の目的

申請者は、自らの民族音楽学研究によって得た知見にもとづき、音楽史教育において、「鑑賞にもとづき理解に至る方法」とは抜本的に異なる「体験にもとづき本質的理解に到達する教育方法」が必要であると考えた。その多くが五線譜を用いない非西洋音楽を、当該音楽の伝授方法にのっとり、楽譜によらず学生自身がうたう、演奏する。それらの身体行動をともなう体験を通して学生は対象とする音楽と西洋音楽との根本的の違いに気づくことになる。その気づきを起点として対象音楽固有の音楽理論へと理解を深めていく。すなわち「自らの身体行動をともなう音楽体験にもとづく本質的理解」を目指す新たな教育方法論を構築することが本研究の目的である。

そもそも楽譜をもとに生成、発展してきた西洋音楽と、楽譜を介在させず、口頭で伝承される音楽は、音楽を成り立たせている理論が根本的に異なる。何がどう異なるのか、その本質的理解に到達するためには、映像や音響資料を視聴する方法では限界がある。実際に体験する要素を授業に持ち込むことにより、(限られた時間の中で)なぜそのような音楽が生成されるのかという根源的、本質的理解に到達することができると思う。

3. 研究の方法

音楽史教育の目的は演奏技術を習得することではない。目的は対象音楽に特有の理論と生成、伝承プロセスを体験を通じて理解することである。したがって対象音楽の何に焦点を当て、集中的に体験するべきか、専門家とともに十分な検討を行うことにより短

時間であっても理解に導くことは可能と考える。対象音楽によってフォーカスすべき、体験すべきトピックは変化していく。対象とする音楽の何をどのように体験すれば、大学授業という制限の中で本質的理解に至ることができるのか、専門家の意見を取り入れ決定していくことになる。そしてトピックが決まり体験すべき内容を決定した上で、初学者に最適な導入映像の制作を行う。映像を通して対象音楽の専門家である演奏家が、初学者の体験をファシリテートする(導く)ことになる。この映像についてはこれまでに刊行された各種の民族音楽、日本伝統音楽映像が参考となるものの、体験型理解に目的を特化した新たな映像資料の制作が必要となる。

初年度は、実際にうたう、演奏する、踊るといった身体行動をとまなう体験型授業について教材を決定し、学習プログラムを検討した。

映像教材制作においては1.教材とすべき音楽ジャンルの決定、2.授業プログラムの内容の策定、3.体験型ワークショップでの試行、4.最終的な指導用映像資料の制作という4つのプロセスを進行させた。

4. 研究成果

3年間で計18本の映像教材を制作し、その全てをYouTube上に公開した。URL:
<https://www.youtube.com/channel/UCdNMYFCaaIEF3V2sIUqeaEA>。

内容は、日本伝統芸能、民族音楽、バロック、ルネサンスの器楽合奏、ポリフォニーの合唱、チェンバロ音楽、ロマン派のピアノ音楽、バロックダンスである。当初の目的にはなかった西洋音楽史に関するものも含まれている。西洋音楽史の映像教材も、音楽の本質的理解を目指すものとなっており、体験を重視する内容となっている。例えば、バロックダンスの映像はそのまま鑑賞教材にもなるし、また映像をもとに教室で基本的な動作やステップを体験できるように制作されている。映像を授業で使用するにあたりハンドブックが必要であると考えていたが、最終的には映像にテロップ、楽譜、ナレーションを加えることで、ハンドブックがなくともそのまま授業で使用できる映像教材を完成させることができた。大学の音楽史はもとより、小中高の音楽科授業で活用できる内容になっている。映像教材を効果的に用いることにより音楽史授業は一方向的な講義ではなく、双方向的、学生の能動的参加が可能な音楽史授業になりえたと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究の成果は映像作品である。映像教材の制作を計18件実施しYouTube上に公開した。内容は1.日本の伝統芸能（能・狂言）、2.世界の民族音楽、3.古楽・リコーダー、4.初期バロックのチャッコーナ、5.ルネサンスのポリフォニー合唱、6.バロックのチェンバロ音楽、7.ロマン派のピアノ音楽、8.バロックダンスである。

URL: <https://www.youtube.com/channel/UCdNMYFCaaiEF3V2sIUqeaEA>

いずれも映像撮影と編集は久保田徹を主担として、30分程度の映像教材には楽譜やテロップ、ナレーションの形で情報を盛り込んでいる。鑑賞教材としてはもちろんのこと、映像をもとに実際に音楽や芸能、ダンスを体験できるように工夫がなされている。大学の音楽史教育のみならず、小中高の学校音楽の授業での活用が可能である。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	久保田 徹 (KUBOTA TETSU) (50420427)	大阪音楽大学・音楽学部・准教授 (34402)	
研究分担者	三島 郁 (MISHIMA KAORU) (20571441)	大阪音楽大学・音楽学部・講師 (34402)	
研究分担者	能登原 由美 (NOTOHARA YUMI) (60379865)	大阪音楽大学・音楽学部・講師 (34402)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------